

文化の中の音楽・音楽の中の文化

——中国の少数民族チャン(羌)族のフィールドワークを通して——

薛 羅 軍

はじめに

「文化の中の音楽」。これはすでに多くの人々によって論じられているテーマである。関連する書籍も最近多く目にするようになった。しかし私は自分の体験に基づいて、敢えて同じテーマで本稿を書こうと思う。

私の専攻は民族音楽学であるが、それは民族学と音楽学を組み合わせた学問である。「人はなぜ歌うのか」「楽器はどのようにして生まれたのか」「この歌は誰からどのようにして伝えられてきたのか」などについて、民族音楽学は追究してきた。民族音楽学者にとって文献（文字資料）が大切なのは言うまでもないが、それにも増して大切なことはフィールドワークである。昔から今に至るまで伝承されている、いわゆる「生きている音楽」を調査して研究するのが民族音楽学研究である。私も中国の少数民族はじめ、日本の奄美大島の島歌など世界の民族音楽を調査対象としており、民謡（音楽）は人類文化の中の重要な部分であると考えている。

世界のどの民族であっても、あるいはどんな地域に生活していても、人々は自分の民族の民謡（音楽）を必ず持っている。その民謡の生命力あふれる力強さには、他の人々の想像を超えるものがある。民謡にはほんの一節の短いものから、長いものだと数十時間に及ぶものまである。

各民族の文化はそれぞれに異なり、民謡ももちろん異なっているが、異民族の文化を理解することにおいて民謡は大きな役割を果たしている。と言うのも中国には五十五の少数民族があるが、彼らの多くは文字を持っていない。その社会生活・生活のルールなどはほとんどが音楽の形で伝承されている。従って民謡は異民族の文化を理解するのに大変役に立つというわけである。

中国の少数民族は大変辺鄙なところに生活していることが多く、他の村の人々との日常的な交流は少ない。その中で毎月、旧暦の一日と十五日に市が立つ。村々から人々は決まった場所に集まり、生活の必需品を売り買いするが、若者たちにとってそこは恋人探しの場所でもある。恋人探しは主に对歌（青年男女の歌垣^{うたがき}）で行われる。

このように中国の少数民族は子どもが生まれた時・恋愛の時・結婚の時・葬式の時など、それぞれの場で歌うべき民謡を持っているが、その一方日常生活においてもまた歌がある。例えば喧嘩の時に歌で自分の気持ちを表現することさえある。兄弟喧嘩の歌、夫婦喧嘩の歌、親子喧嘩の歌、という具合に様々な喧嘩の歌があるのである。また、他人とトラブルが発生した際、村の長老たちが裁定を下

す時にも歌で行う。まさに文化の中の音楽である。

文化は民族の命であるとも言える。また、音楽の中の文化について言えば、多くの少数民族は自分たちの民族の文字を持っていないため、その民族の歴史や文学史などはほとんどが歌師によって歌い継がれている。歌師のその地域における社会的な地位は大変高い。民族の祭や正月の祝いで村人が集まる時には、まず最初に歌師が自分たちの民族の歴史を歌う。それは音楽の中の文化と言えるであろう。

これから私は自分のフィールドワークで知り得た具体的な例を挙げながら、「文化の中の音楽・音楽の中の文化」について考えてみたいと思う。

私が初めてチャン（羌）族地区へ入ったのは2002年の夏、『中国・古羌文化研究会』に参加するため四川省へおもむいた時であった。この学会への日本からの参加者は、当時の東京文化財研究所文芸部長の星野紘氏、帝塚山大学の王冬蘭教授（当時助教授）、それに私を含めて全部で5人であった。アメリカ・ドイツ・フランスなどからの参加者もあった。場所は四川省の松潘県で、この県には有名な観光地、九寨溝・黄龍がある。私はそこで「文化研究的総合性」というテーマで研究発表を行ったが、詳細については他の機会にゆずることとしたい。

学会中、松潘県人民代表大会副主任王星明氏は私たちを松潘県小姓郷大爾辺村人会場に連れて行き、チャン族の歌を聴かせてくれた。氏は大爾辺村出身で、現在は松潘県の県城（県の中心的な町）に住んでいる。私はその場で王氏と3時間以上歓談し、次の日松潘県城に伝わる小姓郷大爾辺村人の歌や踊りを2時間に渡って鑑賞し、同時に録音録画も行った。

日本に戻ってから王冬蘭教授はチャン族についての論文を発表し、私は日本リズム協会の2003年度全国大会でチャン族に関する研究発表を行った。星野紘氏と私はチャン族についてさらに詳細な調査を行う必要を感じ、翌2003年の3月中旬、旧正月を過ぎたばかりの頃にもう一度松潘県へおもむいた。そして初めて松潘県小姓郷大爾辺村において本格的なフィールドワークを行ったのである。

1. チャン（羌）族の概要

チャン族は長い歴史を持つ民族であり、起源は紀元前1000年の殷代にまで遡る。秦漢以後は「羌」と称されるチャン族の諸集団が中国西部や北部を中心に形成され、広く分布したと言う。しかし現在「羌」の名称を持つ民族集団は、四川省西北部に約20万人のチャン族が存在するにすぎない。その具体的居住地は、四川省阿坝藏族羌族自治州東南部の茂県、理県、汶川と黒水、松潘県および綿陽市の北川県である。

言語は大きく南部と北部の二つに分かれる。南部の交通の便利なところのチャン族の人々は、漢族と長期に交流があったため漢語を話し、チャン語を話せない人も増えている。北部では大多数の人はチャン語とチベット語を話す。また、チャン族は自分たちの文字を持たない。チャン族は巨大な石塔「白石」に象徴される山神を信仰し、自然界の霊の存在を信じている（図1）。春の耕作前と秋の収穫後には祭山会という宗教的な祭が盛大に行われる。秋の祭山会の日「チャン暦年」における伝統の

「新年」として1998年に自治州の祝日に定められた。

2002年、筆者らはその祭山会に参加して調査を行ったので、以下これについて報告する。

チャン族が信仰している神は十尊ある。

玉皇：天神・太陽神で、天上と人間のすべてを司る。

山神：主に人間と畜類の安全を司る。

樹神：主に森林を司る。

寨神：主に寨（村）の安全を司る。各村（寨）は自分たちの村（寨）の神に名前を付けている。

地神：主に農産物・土地を司る。

水神：主に川と農業用水を司る。

観音：主に女性の出産育児に関することを司る。

山神母：主に子どもたちを保護する。

川祖：別名を「李二郎神」とも言い、主に村の人々の生命財産と生産活動の安全を司る。

魁星神：邪鬼を追い出す神。

チャン族の村は海拔2000数百メートルの山の斜面にあり、3階建て、あるいは4階建ての石造家屋が密集して並んでいる。4階建物の場合1階は家畜類、つまり豚や牛などを飼う場所になり、2階は応接室と食堂、3階は寝室、4階は小照楼と言われる部屋になっている。小照楼の北・東・西三面は壁になっており、南だけが開いて、太陽光が入るようになっている。家族はここで休憩したり、おしゃべりを楽しんだりする。昔は村の中央部や眺望のきく場所に、外敵の侵入を見張り村の防衛に用いるための高さ20～50メートルの巨大な石塔が建っていたが、現在は数が減っている。

チャン族は一夫一婦制父系家庭を基本単位としており、女性の社会的地位は低く、家庭の支配権のすべては夫が握っている。結婚年齢は早く、一般的に妻は夫より年上である。新婚一年前後、新婦は実家に住むのが普通である。

チャン族の葬式は火葬・土葬・水葬の3種類に分けられる。その中では火葬が最も古くから行われている。彼らは家族専用の火葬場を持っており、一般的には死後3日経ってから火葬する。火葬の前にはシピ（宗教職能者）が読経して死者を天国へ送り、残った子孫と一緒に死者の死を悲しんで泣く。またその時には爆竹を鳴らすが、非正常死亡者（若くして病気や事故で亡くなる者を言う）の葬儀では爆竹は鳴らさない。1949年以後は漢民族の影響を受けて土葬の方が多くなり、現在では火葬は少なくなった。また非正常死亡者に限って川に遺体を流す水葬がなされる。

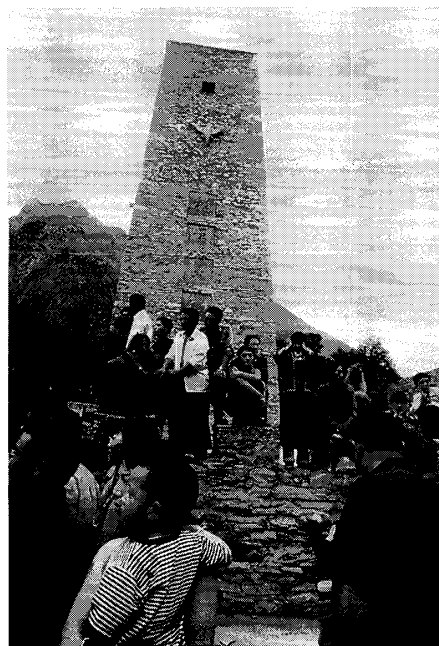


図1

2. 2002年7月25日の祭山会

2002年7月25日は旧暦の6月16日である。本来なら旧暦6月13日が竜王会であるが、『中国古羌文化国際学術研討会』開催に合わせて3日間延期して開催された。

毎年の祭山会は必ず山羊と鶏を生け贄として神に捧げ、願をかける。ほとんどの場合は白山羊を生け贄とし、後述の羊皮鼓を作るのにも利用する。チャン族の村では一年を通して祭が多く、例えば旧暦の正月9日の上陽会、2月19日の観音会、3月3日の娘娘会（真武大帝の誕生日）、4月8日の灌仏会、5月5日の端午の節句、6月13日の竜王会、7月15日の玉帝会、9月19日の観音会、10月18日の地母会、11月19日の太陽生などがある。これらの日になると、村の人々は必ず鶏をしめ、羊をつぶして神と先祖に捧げる。また、3年に1回は山羊の代わりに牛を捧げる。

儀式の時殺した山羊の血は白石塔の周囲に注ぎ、神に願い事をする。神に捧げた動物の肉は後で村人全員で分け合う。我々はこの時初めて転山調（宗教の踊り歌：後述）を聴いた。彼らはまず酒を飲んで、列を作って武士を演じながら歌を歌う。あとは「ヤーオー」などと叫び、「私たち子孫は戦うことを忘れてはいない」ことを祖先に伝える。踊りはそれほど長くはなく、その後、「坐紅鍋」と「耍鉄鏈」という儀式へと続く。

「坐紅鍋」は「赤い鍋に座る」という意味である。大きな鍋に火をかけて、真赤になったらシピ（宗教職能者）が読経して、まず自分が足を鍋に入れて、その後鍋の中に座る。もし病人がいれば、大鍋の中に入れて病気を治すが、シピも病人もやけどをすることはないと言う。我々が参加した時は病人がいなかったので、シピだけが焼けた鍋に足を入れた。「耍鉄鏈」はシピの読経の後で焼けた鉄の鎖を首に掛け、次にそれを病人の首に掛けて病気を治す儀式である。これも病人がいないので、シピが自分の首に焼けた鉄の鎖を掛けるだけで終わった。

そのほかにもシピが出来ることはいろいろある。シピの言うには「人間が病気になるのは何かの鬼が体に憑いている」からなのだそうだ。シピが熱い鍋や鎖を病人につけると、鬼が怖がって病人の体の外に出て病気が治ると言う。

シピには3階級ある。上級のシピは神に仕える者であり、天上の神と会話が出来る。中級のシピは人間のために働き、病気や葬式など一般の祭りごとに係わる。下級のシピは鬼を追い出し、また事故死や凶殺死の人を取り扱う。

チャン族には動物に関するいろいろな言い伝えがあり、祭の時や宗教行事の時には供物として主に山羊・鶏・犬・猿・豚等を使う。前述のように山羊と鶏が最もよく使われるが、犬もよく宗教活動に使われる。例えば「吊狗」は毎年旧暦の4月8日に犬の首に蕎麦の蒸しパンをつけて、そのまま7日間逆さに吊るしておく。7日後に犬がまだ生きていたらその年は良い年であり、もし犬が死んだら凶年という占いの見立てになる。

チャン族の人々は猿が好きである。猿は知恵があるとして、祭の時猿の頭の皮で作った帽子をかぶる。猿の知恵を借りるためである。（図2）

毎年の祭山会はチャン族の人々にとって一番大切な行事であり、一番楽しみな時でもある。チャン族独自の文化の中でも、祭山会はその中心的文化と言えるだろう。

我々の見学した祭山会は午前9時40分に始まり、午後1時くらいまで続いた。今回の祭山会は近くの村の人々も参加していたが、これは『中国古羌文化国際学術研討会』が開催されたからかもしれない。学会参加者以外にも多くの人々が来ていて、現場は混雑していた。我々は「坐紅鍋」「耍鉄鏈」などを見ることは出来ても、撮影まではできなかったほどである。後で聞いたところによると、地元テレビ局や他の取材者も沢山参加していたようである。



図2

その地域では有名な上級シピも参加していた。図3の3人のシピが今回の祭で役割を分担していた、左のシピは58歳（1944年生まれ）で羊を殺す役、真ん中のシピ任永清氏は76歳（1926年生まれ）で様々な祈禱を行う。右のシピは88歳（1914年生まれ）で神と先祖の降霊を担当する。祭山会の終了後、私は任永清氏にインタビューを行った。

氏は12歳から祖父についてシピの修行をし、26歳でやっとシピになった。彼は黒虎寨という村に住んでいる。黒虎寨以外の場所へ祭祀に行く時はいつも山を越えて谷間を渡るため、体はとても丈夫だ。シピは豊富な知識と占いの技術を持っており、毎年いろいろな祭祀を行う他、山林がむやみに伐採されないよう毎年村で山神を祭る行事を司ったり、各家の冠婚葬祭に呼ばれたりもする。

祭山会の最中に、白い布を頭に巻いた女性を多く見かけた。その人たちには、最近亡くなった親族がいて、喪に服しているようである。この白い布には言い伝えがある。明代、黒虎寨から「知」と「勇」を兼ね備えた英雄が出た。彼の功績はとても顕著で、朝廷から黒虎將軍という名前をもらった。

黒虎將軍はふるさとに錦を飾った後、村の人々を指導して農業生産を増やし、砦を増築して外からの侵略に抵抗できる力を強め、村は日増しに強大になっていった。しかしそれは朝廷の不安を引き起こす結果となり、朝廷は黒虎寨を攻めた。黒虎將軍はチャン族の人々を



図3

率いて抵抗したが、衆寡敵せず、破れてしまった。このときから婦人たちは白い布を頭にかぶり、黒虎將軍をしのぶようになったと言う。そしてこの白い布は「万年孝」と呼ばれている（図4）。



図4

3. 松潘県大爾辺村訪問

先述のように我々は2003年3月、成都經由で松潘県に入った。人民代表大会副主任王星明氏や村人とは県城で再会を果たした。翌朝、大爾辺村出身の王星明氏の特別の計らい

により県人民政府の車で午前9時40分頃大爾辺村へ向けて出発し、昼過ぎに大爾辺村に到着した。大爾辺村は70戸、人口300人余りの村である。

大爾辺村での訪問先は王星明氏の妹王星玉さんの嫁ぎ先、甲朶佗氏の家である。チャン族の女性の社会的地位は低いので、彼女が客の前に顔を出すことは少なく、訪問者の我々を直接接待したのは夫の甲朶佗氏であった。彼の家は大爾辺村では裕福な方である。妻と長男・次男夫妻・父親と一緒に生活している。長男は体が弱くて結婚していないが、次男は半年前にチベットの女性と結婚している。この状態は長男にとっては立場があまり良くないらしい。なぜならこの地方の習慣はまず、長男が結婚して、その後次男が結婚するのが順序とされているからだ。中国では長男が親の面倒を見るのが一般的であるが、チャン族の場合は末子が親の面倒を見る習慣がある。

その日の昼食に出た料理は少し腐臭のする肉料理であった。我々はせっかくの料理に手をつけないわけにいかず、結局生にんにくと一緒に、あるいはアルコール度の高い白酒（65度）と共に食した。生にんにくと65度の白酒に殺菌の効果を期待してのことで、フィールドワークに行く時には生にんにくを持参するに限ると再認識した次第である。村人は我々が食事をした後で食事をした。想像するに普段はそうそう食べられないごちそうなのであろう。チャン族地区の人々の生活の貧しさを体感した一場面であった。昼食後、我々は今後の食事には肉料理は不要で、野菜料理にして欲しいという希望を伝えた。そのため、その後の食事には肉料理は出なかった。

今回の大爾辺村訪問の目的は村人の歌を聴かせてもらうことであつたので、前もって5人くらいの人を集めておいてくれるよう要請しておいた。夜、我々が村に入って歌を聴かせてもらい、一人20人民元の謝礼を渡すという段取りであつた。

まだ時間があつたので、午後は甲朶佗氏が案内人となり、村の見学に行った。彼によると村人と彼はみんな親戚関係にあるとのことであつた。

途中、誰もいない静かな場所に色とりどりの旗のようなものが立っているのに気が付いた。聞いてみると墓地だと言う。基本的には、一人の死者に対して旗をひと竿立てるそうだが（図5）、最近

左右に1本ずつ竿を立て、間にもう1本竿を横に渡し、その横に渡した竿に旗をかけてゆくこともあるようだ(図6)。これを見て、つくづく漢族とチャン族との文化の違いを実感した。現在漢民族は祝い事のとき色とりどりの旗を揚げるが、チャン族は弔事の時にこれをやると言うわけだ。

甲朶佗氏の家へ戻る途中、牛を使って犁で畑を耕している村人がおり、その村人が突然歌を歌いだした。かなり甲高い歌声であった。ちょうどビデオカメラで周辺を撮影中であつたので、歌を収録することにした。彼はすぐにカメラの方に向かって歌い始めたが、甲朶佗氏は笑って「あれは歌じゃないよ。牛に向かって話しているだけです。あなた方は牛ではないでしょう。さっさと帰りましょう」とこともなげに言った。後で聞くと「牛よ、この仕事、頑張つてね。今年豊作であつたなら、おいしいものをあげましょう。」といった意味の歌だそう。

甲朶佗氏は歌ではないというが、我々の耳にはこれはまぎれもなく歌である。しかも我々が驚いたのはその豊かな音楽性であつた。メロディー、リズムなど、十分に美しい

音楽の要因を持っている。もし何も知らない一般の人が聴いたら「それは音楽だ」と言うに違いない。しかし我々民族音楽学者の立場では、地元の人が音楽でないと言うならばそれを尊重しなくてはならないだろう。文化というものはそれほどに違いがあるものだ。

甲朶佗氏の家に戻ると地元のチャン族の人々15人もちょうど到着していた。私たちは5人呼んで欲しいと依頼していたにもかかわらず、15人も来ている。それは多分、我々が昨年県城で出会った人々から「謝礼金」の話を聞いたからであろう。20人民元は我々にとってそう大金ではないので、たとえ人数が増えても支払いに支障はない。しかし県城ではラーメン一杯が2人民元。ここは2元でお腹一杯になる世界である。20人民元は地域の人々にとっては決して小さな額ではない。多く謝礼を出すことで、次の調査者に迷惑がかかるかもしれないという危惧を残しながら、結局その晩15人に20人民元ずつの謝礼を支払った。

その地域には有名な観光地「九寨溝」がある。大爾辺村の上手な歌い手の中には九寨溝でアルバ



図5



図6

イトをしている人もいるようだ。その夜、出会った15名の中にもアルバイトをしている人がいたの
で、少し質問してみた。我々の漢語による質問に対して彼の漢語の理解が不十分であったのか、あ
るいは高額謝礼をもらうことを目的に意識的に言ったのかは分からないが以下のようなやりとりが
あった。

「九寨溝での収入はいかかですか」

「いいですよ、1曲歌って15元です」

「1日15元ですか」

「いいえ、1曲で15元」

確かに現在、九寨溝を訪れる観光客には裕福な人が多いからあり得る話である。しかしそれにし
ても1曲15人民元はべらぼうである。お客さんが来たら日に何回でも出演するので、1回15中国元
でも多すぎるくらいであろう。

その晩は甲朵佗氏に150人民元を渡して、15人の村人のために酒を用意してもらった。地元の「白
酒」13本とその家の手作りの酒一壺をみんなで楽しんだ。自家製の酒は口の部分が細くなった壺に
入っており、壺の口に何本かの管をつっこんでみんなで飲む。まず客人、そして年長者といった順で
ある。面白いことに酒を飲むに従って、白湯を加えていく。徐々にアルコールは薄まっていくので、
後で飲む人ほど薄い酒を飲むことになる。

その日の参加者は以下の通りであった。

1. 龍波佗 (long bo ta) (男) 1938年生まれ
2. 洪波 (hong bo) (男) 1944年生まれ
3. 班登答 (ban deng ta) (男) 1926年生まれ
4. 小龍不車立 (xiao long bu che li) (男) 1956年生まれ
5. 無那衣 (wu la yi) (男) 1957年生まれ
6. 諾美搓 (ru mei chuo) (女) 1951年生まれ
7. 熱摸 (re muo) (女) 1959年生まれ 無那衣の妻
8. 羅摸答 (luo muo ta) (女) 1954年生まれ
9. 存答 (cuen ta) (男) 1948年生まれ
10. 郎中搓 (lang zhong chuo) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ
11. 桑吉美 (san ji mei) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ
12. 打龍 (da long) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ
13. 克美答 (ke mei ta) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ
14. 熱美答 (re mei ta) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ
15. 如美 (ru mei) (女) 生年月日不明 1950年代生まれ

以上の15名は大爾辺村の村人である。名前の漢字は漢語の宛て字で、読みは中国語発音のローマ
字で表記した。全員学校での教育を受けていない。

大爾辺村は現在、毎晩7時から10時くらいまで、発電機によって照明用の電気が供給されている。村のあちこちで大きな丸い衛星放送用アンテナを見たが、村人がこれでテレビを見ることが出来るのかどうかについては疑問である（図7）。というのも、我々が訪問した日は調査のため特別に村長の許可を得て一晩中発電してもらっていたのだが、ただそれでも夜が早いうちは各戸で電気を使っているのに電圧が安定せず、ビデオ撮影のための光量が十分に得られなかったほどだからである。夜も更け、11時過ぎには電圧が安定し、十分な光量が得られた。



図7

15名の名前と生年月日記録後の8時30分頃、まず龍波侘氏の「開壺歌」から開始。その歌は儀式を始める時に歌う歌だが、それを聴いた時、我々には「歌」と言うより早口言葉のように聞こえた。神様の名前と自分の先祖代々の名前を呼んで、「これからお酒を飲みます」と神様と先祖に報告する歌である。その後はみんなで酒を飲み、歌を歌った（図8）。



図8

4. チャン（羌）族の音楽ジャンル

チャン族の音楽は3種類に大別できる。民謡、器楽曲、そして舞踏音楽である。以下チャン族の音楽を簡単に紹介する。

4-1 民謡

民謡には労働の歌・山歌・恋愛の歌・しきたりの歌・酒の歌・子どもの歌などがある。

4-1-1 労働の歌：集団で労働する時に歌う歌である。一人が領唱して、残る人々が続いて歌う。領唱者は労働のリーダーである。歌によって作業が統一され、力を合わせることが出来る。その労働の歌はリズム感が強く、歌詞も面白い。曲自体はそれほど長くなく、一定のリズムで歌詞を繰り返し歌う。歌詞は即興のものである。

4-1-2 山歌：チャン族は山の中の海拔2000数百メートルの山の斜面で生活しており、山で畑仕事をすると「山歌」をよく歌う。「山歌」と「労働の歌」の違いは、労働の歌は何人かで歌うのに対し、山歌は主に一人で歌うことである。リズムは決まっておらず、音域は労働の歌より広い。高音で歌うこ

とが多く、メロディーは自由で、曲の前後に大きく自由な叫び声が入る。また山歌の多くはチャン語で歌われる。

4-1-3 恋愛の歌：恋愛の歌はチャン族の青年男女の間で歌われる。一般には村の中で歌われることはなく、村外や山で歌われている。恋愛の歌は漢語で歌うことが多いが、チャン語で歌うのもある。メロディーは優しく、歌の形は独唱と対唱（対歌、歌垣）がある。中国少数民族の民謡の内、恋愛の歌は全体の80%以上を占める。少数民族の人々は同じ村の人と恋愛の歌を歌い合うことは許されない。なぜなら同じ村の人はほとんどがお互いに血縁関係にあり、結婚は許されないからだ。先述のように、他の村の人と出合いの機会は日常的には少ないが、市が立つ時などに恋人探しをして歌を歌い合う。

4-1-4 しきたりの歌：これは生活に関する歌である、儀式の歌もこれに含まれる。儀式の歌はシピ（宗教職能者）によって歌われる。こうした歌はメロディーが単純で、リズム感が強い。歌ったり話したりしている様にも聞こえる。歌の内容は神様への願いごとであったり、村人の平安を祈るものであったりする。葬式の歌にもシピが歌を歌う。それは死者が天国へ行くようにと祈る意味が強い。また親族は死者に対しての感謝・思い出を込めて、あるいは死後の世界での平安を願って歌う。

結婚の時に歌う歌もある。まず新婦は、夫の家へ行く前の晩に友人たちと一緒に過して歌を歌う。友人たちからお祝いの歌を歌ってもらい、新婦は自分の少女時代の懐かしい思い出や親に対しての感謝の気持ちを込めて「泣き歌」を歌う。このような歌は即興のものが多く、同じような曲を繰り返して歌う。リズムは自由である。翌日は新郎の家へ行き、祝いをする。

4-1-5 酒の歌：チャン族の人々は酒が好きで、祭の席や客人を招待する席には必ずお酒が出される。主人と客人は、酒を飲んで歌を歌う。先に述べたような龍波侏氏の「開壺歌」では、神様と先祖たちを呼んで酒席を設けたことを報告してから、酒を飲み歌を歌う。

龍波侏氏の「開壺歌」に続く曲は、チャン語の歌であった。我々調査者に理解できなかったが、これは客人に酒を勧めるための「客をもてなす歌」であった。これは恐らく中国少数民族によく見られる儀礼的なもので、神と先祖に続いて客人にお酒を飲ませる。酒を飲んだらみんなで歌を歌い、踊りを踊る。初めは歌が中心で、その後足で床を蹴りながらリズムを取って踊る。伴奏の楽器はないが、足で床を蹴る音はリズム感が強くて、大鼓を叩くような感じである。

4-1-6 子どもの歌：チャン族の人々は歌うが好きだ。子どもたちは日々歌が聞こえるような環境で育つので、自然と歌を覚える。子どもたちは遊ぶ時、牛や羊を放牧する時に歌を歌う。リズムは明快で、簡単で覚え易い。

4-2 器楽曲

チャン族の楽器は多くない。主にチャン笛（羌笛）・口琴・羊皮鼓である。今回これらの楽器の実物を調査することが出来た。

4-2-1 チャン笛（羌笛）：チャン笛の歴史はかなり古い。中国最古の字書『説文解字』にもチャン笛の記述がある。竹で作り、1本のものもあるし、2本を組み合わせたものもある。長さは15 cm～18 cm ほどで、5あるいは6個の指穴がある。5穴のものは「si, do, re, mi, fa」、6穴のものは「la,

si, do, re, mi, fa」の音階を出せる。笛の一端を口に当てて演奏する（図9）。

4-2-2 チャン族の口琴：主にチャン族女性の使う楽器である。長さは10 cmで、類似した楽器は他の多くの民族、例えば中国や東南アジアの少数民族、また日本のアイヌ族にもある。

4-2-3 チャン族の羊皮鼓：打楽器である。丸い単面の羊皮鼓で、直径約35 cm～40 cm。縁の高さは約15 cm、鼓の取手は縁の真ん中についていて、取手の長さは鼓の直径と同じ。演奏の際は左手で取手を握り、右手のバチで叩く。

チャン族の羊皮鼓の由来には伝説がある。昔チャン族には自分の文字があり、それは白樺の皮に書いてあった。ある日白山羊がそのチャン族文字を記録した白樺の皮を食べってしまった。首領が怒ってその白山羊を殺し、皮で太鼓を作った。シピが羊皮鼓を叩く時には昔の経文も全部思い出して歌うことが出来た。それで現在に至るまで、チャン族の人々は祭やお祝いの時に必ず羊皮鼓を叩くのである。



図9

4-3 舞踏音楽

チャン族の踊りの音楽には2種類ある。宗教的な踊りと民間の踊りである。

4-3-1 宗教的な踊り：主にシピが羊皮鼓に合わせて踊るもので、祭山会の開始の時や、鬼を追い出す時などに踊る。リズムの種類は豊富で100種類を数えるが、現在それを全て叩くことが出来る人はほとんどいないと言う。

4-3-2 民間の踊り：男女がそれぞれ列を作って、歌い踊る。音楽は最初ゆっくりであるが、次第に早くなり、みんなで楽しんで踊る。踊りの途中で男女の位置が入れ換ったりする。男性が先頭で、女性がついて踊り、そのうち男女が円形になって踊る。チャン族居住地域以外の吹打楽器もあるが、それは漢民族から伝わった楽器で、主に結婚式と葬式の時使用されている。

調査の晩、大爾辺村の村人が歌った歌は次の通り。

- (1) 開壺歌：宴会の開始の時の歌である。……「酒の歌」
- (2) 歓迎歌：客を歓迎し、酒を勧める。……「酒の歌」
- (3) 酒歌：主人が客に感謝の意を表す歌。……「酒の歌」
- (4) 礼を言う歌：酒歌に対して客が謝意を伝える歌。……「酒の歌」
- (5) リーサ：叙事歌（質問と答え・二人で交互に歌う）。……「しきたりの歌」
- (6) 収穫の歌：収穫の時に歌う。……「労働の歌」
- (7) 収穫後帰宅時の歌：主人に帰宅を報告する歌。……「労働の歌」

- (8) カラー（出かける時の歌）：「出かけるのは楽しいよ、今日何か良いことに会いますように」……「山歌」
- (9) カラー：(8)と同じであるが、歌詞は異なる。……「山歌」
- (10) アイハラ：叙事歌……「しきたりの歌」
- (11) アイハラ：叙事歌……「しきたりの歌」
- (12) 思恋歌：「あなたに会いたいよ。今日は満月の日だから、(あなたも)早く寝て下さいね、私たちは夢の中で会いましょう」……「恋愛の歌」
- (13) 春耕調：「春になりました。早く仕事をしましょう。春に頑張ったら、秋には良い収穫ができますよ」……「労働の歌」
- (14) アイハラ
- (15) 口琴演奏
- (16) 笛を演奏
- (17) リーサ：良い生活・良い気持ち・仲が良い……「しきたりの歌」
- (18) 歓楽調：踊りの音楽
- (19) 対歌調：男女恋愛の歌……「恋愛の歌」
- (20) 収穫後帰宅の歌：一日の終わりの歌……「労働の歌」
- (21) 転山調：山の神に対しての歌
- (22) 正月の歌：これは男女の掛け合いの歌でお祝いの歌……「しきたりの歌」
- (23) ローム：女性が歌って、男性が伴唱。叙事歌……「しきたりの歌」
- (24) ラーム：叙事歌の一種
- (25) アラリシム：民間舞踊の音楽
- (26) 神様を送る：酒の歌であり、酒宴が終わるの時にも歌われる……「酒の歌」
- (27) 転山調：宗教舞踊の歌
- (28) 寸劇：物乞い夫妻
- (29) リーサ：領唱と一緒に歌い、質問と答えを交互に歌う
- (30) 鬼ごっこ
- (31) 歓楽調：民間の踊り
- (32) 笛の演奏
- (33) 笛の演奏

我々は深夜2時30分まで彼らの歌と踊りを記録した。深夜12時頃からは電圧も安定して光も良く、彼らはお酒をよく飲んで、喜び自由に歌い踊ること朝6時にまで及んだ。夜中から大雪になりかなり寒くなった。彼らの歌はその場で曲名だけを書き取り、その後松潘県城に戻ってから、王星明氏の家で録画したビデオを見つつ、歌の内容を記録した。

歌の(1)から(4)までは宴会開始の歌で、決まった内容である。特に(1)の歌は神と先祖に捧げ

山歌

チャン族民謡



労働の歌

チャン族民謡



る歌で、参加者はみんな静かに聞いている。既に述べたようにそれは歌と言うより早口言葉のように聞こえる。このように早口で歌えることが我々には信じられない思いであったが、彼らが若い頃から先輩の歌を聴き親しんでいるからなのだろうか。

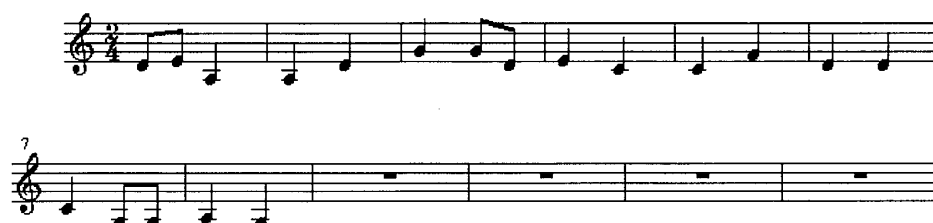
(5)以降の曲は自由に歌う。同じ歌を歌う時もあるし、違う時もある。労働の歌のうち(6)と(7)は収穫の時の助け合いの歌である。例えばまずA家の畑仕事を村人総出でやる。A家の作業が終わると次はB家という具合に順番に農作業をして行く。その日村人に来てもらったA家では酒と食事を用意する。農作業を終えた村人はA家に帰ってきて「私たちは今、帰ってきました。おいしい食事とお酒をお願いします」と歌う。

(26)の歌は、「今回の宴会はここまで」と神と先祖たちに報告し、「これから私たちは仕事を一生懸命しますから、今度またお会いしましょう」という意味のことを歌う。これは毎回定まっている歌である。

以上述べたチャン族の音楽事情は我々のフィールドワークと資料に基づいて記述したものである。社会が変わり、自然環境も変わって、村人の生活もそれらに影響を受けているのではあろうが、彼ら

労働の歌

チャン族民謡



酒歌

チャン族民謡



の間には昔からの習慣がしっかり受け継がれているように思われる。だからこそ(1)の歌に見られるような早口の歌唱テクニックを、村人たちは受け継いできたのだろう。

また、外部の人には理解できないこと、村の人だけが了解していることも多い。例えば結婚して式を挙げていながら、役所に届けを出していない村人がある。今回お世話になった甲朶佗氏の次男の場合もそうで、彼は役所に結婚届を出していない。しかし村人は彼が結婚したと認識しているのである。彼らの生活範囲はそれほど広くないので、村の中での共通認識があればそれでよいと考えているし、また実際それで何の不都合もない。子どもが何人か生まれて初めて役所に届けを出す場合もあるようだ。

児童の歌

チャン族民謡



5. 結び

今回の調査で、神や先祖に対しての「歌」は昔からほとんど変わっていないように感じた。その他の民族の歌も同様であろうと考える。世の中に不変のものはない。しかし今回の調査で、民族音楽は他の文化に比べて変化が遅いことが伺える。また「地域性」ということも大きく、地元の人には「歌」と認識していなくても、外部の者が聞くと「歌」だと受け取る場合があるし、またその逆もある。

いずれにせよ今回の調査で分かったことは、「音楽は自分たちを楽しくする」ためにあるということだ。また、習慣やルールを伝えるという社会的意味もある。このように民族の歴史は歌によって受け継がれていくことが多い。

文化の形成と発展にはその文化の継承と創造が必要である。人は特定の社会環境の中で生まれる。その社会環境にある文化は先祖から伝承され、人は自身が意識していなくとも、その文化を知りその文化の継承者となって行く。そして人は文化の創造者にもなり得る。もちろん現代のグローバル化社会の影響を避けることは出来ないが、しかしそれは文化を失うことではなく、文化の変容であると言わなければならない。

今回チャン族の調査で分かったように、民族の生活の中にはいろいろな文化が残っている。私は民族音楽の切り口から社会を見たが、民族音楽は元来、自分たちが楽しむための活動であり、外部の人々には理解できないこともある。そして音楽は、文化の中で一番変化が遅いものであろう。文字を

持っていない民族は、文字を持つ民族に比べて音楽により多く依存して自らの文化を伝承している。民間の歌い手たちは現在に至るまで、自分たちの歴史を歌で歌うことが出来る。まさに「音楽の中の文化」であり、またこれは「文化の中の音楽」だと言えるであろう。

「文化の中の音楽、音楽の中の文化」、大きなテーマではあるが、今後も力を注いで研究して行きたいと考えている。

参考文献

(中国語)

1. 『羌村社会』徐平著 中国社会科学出版社 1993年8月
2. 『中国各少数民族民間音楽概述』杜亜雄編著 人民音楽出版社 1993年11月
3. 『中国少数民族習俗與伝統文化』張力平編著 広西民族出版社 1994年8月
4. 『中国少数民族禁忌大観』方素梅主編 広西民族出版社 1996年1月
5. 『土地与歌』喬建中著 山東文芸出版社 1998年2月
6. 『松潘県志』松潘県編集委員会編 民族出版社 1999年8月
7. 『北川羌族』北川羌族編委会 2000年
8. 『中国少数民族伝統音楽』田聯韜主編 中央民族大学出版社 2001年10月
9. 『古羌文化手冊』中国古羌文化学術研究会編 2002年7月

(日本語)

1. 『チャン族と四川チベット族』松岡正子著 ゆまに書房 2000年9月
2. 『歌・踊り・祈りのアジア』星野紘・野村伸一編著 勉誠出版 2000年11月
3. 『中国少数民族事典』田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C. ダニエルス著 東京堂出版 2001年9月
4. 『人はなぜ歌い踊るのか』星野紘著 勉誠出版 2002年11月